



写真撮影 / 小島アツシ

個性を担いで、いまを素直に生きたい彼らへの期待と心配



中間 真一 HRI 社会研究部 部長

# 若者たちは「次なる社会」の開拓者か

未来を明るく見通しにくい時代の現在の若者たち。学力低下、ひきこもり、フリーター、非婚晩婚、育児拒否…。これまでの社会の大人たちは、これからの社会の若者たちを批判する。

HRIが予測する次の社会は、「最適化社会」を経た「自律社会」。若者たちの可能性に眼差しを向けた。

それぞれの  
世代の肩つき

これまで3年間のリサーチ結果を振り返ると、日本人の生き方の特徴は、その「肩つき」で表すことができるようだ。すなわち、日本の復興と成長を仕事と家庭の場で、自身の肩で担ってきた60代以降の「怒り肩シニア」、戦後世代「ロンティア」として社会体制に抵抗し、新たな生き方を志向しつつも、経済成長という急流に吸い込まれていった「パド入り怒り肩」の団塊ブレシニア世代、従来の潮と新たな潮の激しい渦の中で、溺れぬように風を待とうとする「なで肩ミドル」という具合だ。納得度合いはいかがだろうか。こうして、各世代を分けられる一方、これまでの世代はみな成長基調社会の下で大人社会入りを果たした世代として共通している。

それに対して、今回のヤング世代（20～34歳）は、右肩上がりの経済成長が終わり、未来への希望の見通しがつきにくい時代に大人社会に入っていくようにしている。そんな彼らは、どんな「肩つき」をしているのだろうか。私はプロジェクトスタート時に「ガラス肩」と予想した。その後、多くの若者に会うて話を交わしたアンケート調査の結果を眺めた。そこから感じ取れたのは、脆いだけの「ガラス肩」ではなかった。大



人社会から見る彼らの肩は脆く頼りない。しかし、彼ら自身は大人社会こそ脆く頼れないと、素直な気持ちで確信していた。とくに20代の若者たちや、地方で生きる若者たちの中からは、未来を託したくなるような頼もしさで、これで世間を渡っていけるのだろうかという危うさが同居する連中が何人も見つかった。彼らは飾りもなく、力みもなく、素直に「ヌードな肩」で生きようとしている。

## 「都市型情報社会の申し子 ヤング世代」

今回対象とした20代、30代前半の若者たちは、上の世代に較べると、学生から子育て中の親まで、現在の立場は多種多様であり、まとめて語るには難しい。しかし、まずは彼らが、どんな社会で、どんな生き方をしてきたのかを確認することから始めたい。

「この年齢層が生まれたのは、1969〜1983年、概ね70年代生まれとくわれる世代だ。彼らの幼少期は、飛躍的に衛生環境が向上した時代として位置づけられている。言い方を換えれば、清潔社会の始まりであり、都市型の人工的環境が整備された中で発育した最初の世代といえる。これは、もちろん豊かさでもあるが、一方

では70年代生まれの9割が、なんらかのアレルギイ体質であるという、清潔社会の弊害を表す調査結果も発表されている。また、発汗量が少ないという医学データもある。とにかく、それ以前の世代の幼少期と比較して、都市化、人工化、清潔化、快適化、省力化がキーワードとなる発育環境があつたことに間違いない。

また、任天堂のファミリーコンピュータが83年に発売され、「スーパーマリオブラザーズ」や、「ドラゴンクエスト」などのゲームソフトが飛ぶように売れ、子どもたちの遊び方は大きく変化した。今回の対象となっているヤング世代は、まさにテレビゲームの歴史に重なり、バーチャルリアリティ環境に対して、なんら抵抗感を持たない真性テレビゲーム世代だ。

## 「個性」の価値を 刷り込まれて育つた

彼らが受けてきた「教育」は、どうだろう。ここにもエポック・メイキングな出来事が見つかると、1987年の臨時教育審議会最終答申において、「個性重視」の教育改革が打ち出され、これを受けて89年には新学習指導要領が施行された。とくに中学校のカリキュラムにおいて、「個性重視」への転換が図られた。ちなみに新聞記事

データベースで、「個性」と「教育」をキーワードに両者を満たす記事を検索してみると、この時期を境に急増を始め、90年代を通じて増加の一途をたどっている。そして、2000年に入ってからはその傾向は失速している。大学入試にしても、AO入試などの個性派や一芸に秀でた志願者に有利な選抜方式が進んでいる。また、大学進学率を見ると、すでに志望者全入に近い実情がある中、多くの学生にとって、大学は最高学府というよりも、就職予備校としての位置づけが鮮明になるばかりだ。

大学側もそれを助長している。就職のためのエントリーシートを上手に書くノウハウを教え、大学の序列を前提とした就職指導をし、高い就職率を積極的にPRする大学も数多い。

もちろん、こんな流れに乗りきれずに苦しむ大学生もいる。安直な「個性」プレゼン技術よりも、「素直」を大事にした結果、個性派フリーターや起業家となった若者たちだ。

とにかく、ヤング世代、とくに20代の若者たちが受けてきた教育の特徴は、良くも悪くも、「個性」という言葉のシャワーを浴び続けてきたといつ点にあることには間違いない。しかし、その個性が生き方にしっかりと染みこみつつある者と、個性づくりのための個性が表面に装着されている



だけの「自己チュー」の者の差は著しく広がってしまった。試行錯誤の中の「個性重視教育」の成功と失敗の姿なのだろう。

そして、大人社会への「デビュー」「就職」を迎えたヤング世代。世間は彼らのフリーター「問題を騒ぐ」。平成15年版国民生活白書を見ると、90年代後半から年々上昇してきたフリーター数は417万人(2001年)。学生と正社員以外の主婦を除く15〜34歳人口全体に対する比率は21.2%に及ぶ。そして、なおも増加基調は続いている。このフリーター急増傾向が始まった90年代後半に20代を迎えた人々こそ、今回のテーマ「ヤング世代」の中心的存在。70年代後半生まれの都市型快適環境で「個性重視教育」を受けてきた波頭の世代なのだ。「このような彼らの生い立ち環境を下敷きにして、今回の調査結果を眺めてみると、腑に落ちることが少なくない。

## マイ・ステージを求める 明るい女子大生たち

私たちは、このような若者たちのありさまを、アンケート調査やインタビュー、インフォーマルな場でのやりとりを通じて探ってきた。アンケート調査結果の分析を中心とした考察は、HRI研究員によるレポートに詳述するので、ここでは、若者た

ちの声「から探り得たヤング世代像の紹介を中心に進めたい。

まずは、本冊子に寄稿いただいた高田公理教授のゼミ生にインタビューをしたときのことだ。バイト、サークル、授業やゼミ、それぞれの優先順位でスケジュールがぎゅしり埋まった彼女たちからは、世間に対する抵抗や恨み、不安や不満の類のメッセージは発せられない。憂いの影も見あたらない。大学に学問をしに来ている風でもなく、最初はよそ行きの自分を装っているのかと訝したが、そうでもなさそうだった。とにかく、あけすけの素直さと楽しさに満ちている。

その中の一人が、「わたしは輝きたい」と言った。周囲はそれを茶化すどころか、わたしも輝きたい」と共感する。高田教授は、学生の三大インセンティブを、「お金がもつかる」「おもしろい」「エキップができる」と指摘し、「芸能界」が生き方モデルと語っていたが、彼女たちの話すことと、その場の雰囲気は、まさにその通りといった様子である。そして、彼女たちの求める「輝いている自分」の姿は、トップスターでなくてもよい。まずは、自らが納得していること。そして、少しがんばって手が届く目標をめざし、実現すること。そこで、一人の友人でも自分を認めてくれている相手がいるという生き方を欲している。たった一つの小さ

なスポットライトしか当たらなくても、「マイ・タレント才能」を活かし、それを認めてくれる「マイ・フレンド」がいる中で、「マイ・ステージ」に上がれる生き方をめざしている。世の中で、自分が生きているということ、「マイ・ライフ」を確かめられる舞台を求めている。

## 「いま・ここ」に生きる自分が 大事なフリーターたち

男女数名のフリーターの若者に集まって

もらったインタビューでは、音楽活動を続けたい、自分なりの出版編集を手がけたい、映画制作を続けたい、芸人としてやっていきたい、自分の魅力を磨きたいと、口々に自分のやりたいことを訴えていた。みな、正社員として就職した友人たちの様子、強がりではなく、気の毒そうに語っていた。しかし、そんな彼らの生き方に将来の姿は描き得るのだろうか。

どうも、彼らはいまの延長線上に未来を見ようとしていない。だから、「いま・ここ」で輝くことに生きる価値がある。それ



を毎日積み重ねることに満足する生き方のようだ。「これから」のための備えよりも「いま」の充実と「これまで」の思いに素直に生きている。

その結果、「これから」への備えとしての彼らの「学び方」は、資格などの「持ち物」取得で他人に認められる確証を志向しがちだ。また、「いま」これまで」を大事にするがゆえに、「彼らの」働き方」は、自分づくりに「自分探し」で「自己本位の生き方を志向する」。

「この考え方」こそ、私も含めたこれまでの世代、すなわち「これから」の価値のために生きてきた世代との大きな差異だ。彼らは、大人社会の入口でモラトリアムにあるのではなく、従来の大人社会とは違うコースに向かっているようだ。

## 組織トップより、自己ベストフリーランスを志向する大学生

大学生の学力低下や新卒就職氷河期が叫ばれる現在、トップレベル校のひと握りの優秀な学生以外は、その他大勢の大学生としてひとくくりにされるのが、就職活動を通じた大学生たちの実感だった。それではその中でひと握りの優秀な学生たちは、なにを考えて、いかに生きようとしているのだろうか。普通の大学生とは、それ



ほど大きく違うのだろうか。そう思い、東大などの学生に集まってもらいグループインタビューを実施した。確かに、彼らの発言はよどみなく、自らの主張を持つて的確な表現によつて練り出されていた。彼らはそれぞれに、都市型競争社会の勝ち組奏効した個性重視教育の申し子、海外生活によるグローバルな視野の獲得者としていまのステージに立っているというところがひしひしと感じられた。

彼らのほとんどは、自分の生き方の方向性を定めていた。あるいは考えていたという点に、その他の学生との明らかな差が感じられた。あいまいな自分探しではなく、自分のビジョンと、いまやるべきことの自覚を持っている。「決めた道を突き進んで、自己の確立へ」という感覚は薄く、「ビジョンに基づくプロセスを通じて、自分を探していく」という、素直な自分づくりの考え方で共通している。そして、もはや「中央官庁や大企業の名刺で仕事一筋に格好良く」とか、「女性として自立するために仕事は続けるべき」という力みは微塵も感じられない。「そんなことはすでに幻想として瓦解した」と言い切る者もいる。その中の一人が、「私たちの考え方は、フリーター志向ではなくフリーランス志向なんです」と言ったが、まさにこの発言こそ、個性重視教育が産み落とした若者の一言な

のかと感じた。

## 漱石も悩んでいた 個人主義へのあこがれと不安

この発言から思い出されたのは夏目漱石だ。「私の個人主義」(講談社学術文庫)という漱石の講演録集がある。そこに所収されている「道楽と職業」は、私の個人主義の2編には、イギリス留学時に漱石が感じ取った西欧個人主義への共感と違和感が、にじみ出ていて興味深い。そしてそれらはちょうど現代日本社会の若者問題にも通じる。夏目漱石による現代若者論は、長山靖生氏の「若者はなぜ決められないか」(ちくま新書)に優れた論者があるが、私も即座に夏目漱石のフリーター是認論と、明治・大正期と現在というパラダイムシフトの時代背景を重ねた。「道楽と職業」では、自分の働きがいと、経済的な報酬の折り合いが難しく、大学出の秀才でも困っているという様子を訴え、近代社会の問題を訴えている。そして、大正初期の学習院での講演「私の個人主義」には、次のような発言が見つかる。

仕事をして何かに掘り中てるまで進んで行くという事は、つまりあなた方の幸福のため安心のためには相違ありません



んが、何故それが幸福と安心をもたらすかという点、貴方方の有って生れた個性がそこに打つかって始めて腰がすわるからでしょう。そうしてそこに腰を落付けて漸々前の方に進んで行くとその個性がますます発展して行くからでしょう。ああそこにおれの安住の地位があったと、あなた方の仕事とあなた方の個性がしっくり合った時に、始めていい得るのでしょう。

「この道楽(己)のためにする仕事(のすめ)は、約百年を経た現在の若者たちの生き方に結実しようとしている。たぶんこれは今回集まってもうた大学生の特殊性ではない。私の知り合いの先生の多くも、同様に感じていた。彼らは、自分のかけがえのなさすなわち「わたし」という固有性を、いかに最適に「社会的役割」にマッチングさせるかを、まじめに考えて行動している。最近「一攫千金の金儲けベンチャーではなく地道な社会課題の解決を担う「社会起業家」が注目されているが、その担い手には大学生も多い。優秀な学生たちも、そこに集まっている。そんな学生ベンチャー企業の中で元気に活躍する連中たちの顔には、まさにそのマッチングの喜びが感じられた。

## 若者たちは「これまで」と違う「これから」に向かっているのか

また、このことはエリート若者たちに限ることではない。いま、老人福祉施設や、まちの整形外科のリハビリルームをのぞくと一目瞭然だ。元気な若者たちが介護士、作業療法士や理学療法士として、お年寄りを相手に生き生きと働く姿であふれている。ある20代前半の女性介護士は、「この仕事をしたから、わたしでも、おばあちゃんに頼りにされるうれしさと責任を感じられる」と話してくれた。彼らがこの仕事を年老いるまで続けるとは考えにくい。彼らは自分の将来をどう考えているのだろうか」と心配になる。しかし、当事者たちの不安は、少なくとも私たち年輩者の心配よりもずっと軽いようだ。

このように、現代のヤング世代、とくに20代の若者たちからは、「自分は自分でなければならぬ」という意識が、善し悪し含めて浸透している様子がうかがえる。HRIのアンケート調査では、自分の現在の生活イメージとして該当するものを選択する各世代共通の質問を設けた。その回答結果を見ると、「个性的な」「自分らしい」「生きがいのある」という項目の選択率はミドル世代に対してヤング世代は高い。また、昨年6月に内閣府が実施した世

## ヤング世代のライオンズストーリー

- 1970年 昭和45年  
大阪で万国博覧会開催
- 1971年 昭和46年  
ドル・シヨク。円が変動相場制へ移行
- 1972年 昭和47年  
上野動物園でパンダが初公開
- 1973年 昭和48年  
米軍、ベトナム戦争から撤退
- 第一次石油シヨク
- 1974年 昭和49年  
コリ・ケラーの登場で  
超能力ブーム
- 1975年 昭和50年  
山陽新幹線開通、東京、博多間が約7時間に
- 1976年 昭和51年  
モントリオールオリンピック。新体操のコンネチが人気
- 1977年 昭和52年  
日本赤軍が日航機をハイジャック
- 1978年 昭和53年  
ピンクレディーブームが頂点に振りまねが大流行
- 1979年 昭和54年  
ソニートのウォークマン発売
- インベーダーゲームが街中を席卷
- 「機動戦士ガンダム」がテレビに初登場
- 1980年 昭和55年  
松田聖子、田原俊彦らがデビュー
- 金属バト殺人事件発生
- 1981年 昭和56年  
マンガ、Dr.スランプ
- 「くるる星やつら」がベスト
- 1982年 昭和57年  
ホテルニュージャパン火災、翌日に日航機墜落事故
- 「オレたちひょうきん族」が大ブーム
- 「積木くずし」がベストセラー入り
- 1983年 昭和58年  
東京ディズランド開園









布を説明するのに、パレートの法則、いわゆる2:8の法則が引用されることが多い。ここまで述べてきた若者肯定論も、優れた2割だけに該当する話だという批判もあるだろう。しかし、私は優れた2割がなにをめぐしなにを考え、いかに行動しているかが全体の方向づけに大きな影響力を持つと考えている。だから、今回対象としたヤング世代、中でも20代の若者たちは、「自分本位」と「社会本位」、自分らしさと社会とのつながり、この折り合いをつけることにより、自立して、自律した生き方で社会の中の役割を担い、連帯していけるのではないかと思う。彼らにはその覚悟と割り切りがすでにあると感じられた。

そして、深刻なヤング世代の社会問題は、まずすでにミドル層を間近に控え、確固た

る社会的立場を求められながらも、自分と社会の間の折り合いをつけられずに悩む30代前半の人々の支援にあるように感じる。彼らは30代後半、バブル入社組世代の非力を、批判的に冷やかに眺めつつも、仕事、結婚、家族など、自らの生き方への問いかけに迫られ、明快な答えを出せずにいる。社会においても、企業組織における人材マネジメントにおいても、30代前半世代のキャリアや生き方の支援について、本格的な取り組みが必要だ。

## 自立と自律への突破口は 若者たちの「寛容」と「社交」か

最後に再び世代を通して論じてみたい。私は剣道の師範から、「ことあるごとく守・

破・離」の教えを受けてきたために、「この3ステップが染みついてしまっている。そのせいか、シリア、ミドル、ヤングの生き方を表し、自律社会への課題を示すのにも、この3段階があてはまるように感じている。

近い将来には、仕事場や家族と自分を結んでいたものが欠けていくシリア世代、彼らはそのことを頭ではわかっているが、行動では離れがたく戸惑っていた。「離れた先の自立と連帯の構築を求められている。パラタイムシフトと人生の転換期が不幸にも重なったミドル世代。これまで守ってきたものを破る勢いを持って、破れていくまでの時間を稼ごうとする構えが明らかだった。ミドル世代には「破」ことはできないのだろうか。経済的中心としての仕事の場合ではなく、地域社会など暮らしの場から、自立と自律への突破口をつくってみてはどうだろうか。

そして、大人社会の入口に立つヤング世代、どつやら彼らには、「守」るべき型がないのかもしれない。彼らは、新たな社会への型のつくり手の波頭に立ちている。波頭は不安定で崩れやすい。「個」の行き過ぎが「孤」に化す危険をはらんでいる。だからと言って、これまでの社会に戻って来いというのではない。個人が手をつないで、自立と自律の大きな波をつくってほしい。そのキーワードは、「寛容」と「社交」かもしれない。

1994年(平成6年)  
「家なき子」ヒット、同情するなら金をくれ」が流行語に

1995年(平成7年)  
ソートがブレイク、シューティングを発売

阪神大震災、地下鉄サリン事件発生  
野茂英雄が大リーグで大活躍  
ウインドウズ95発売  
パリンン普及に拍車

1996年  
(平成8年)

プリクラが登場、中高生の人気を集める  
安室奈美恵、e.g.o.sなど小室ファミリーがヒット連発

1997年(平成9年)  
たまごっち、ポケモンが大ブーム  
神戸で「酒鬼薔薇

事件」、犯人の中学生逮捕

1998年  
(平成10年)

長野冬季五輪開催、サッカーW杯に日本初出場  
「タイタック」が前年の「ものけ姫」を抜く大ヒット

1999年(平成11年)  
Iモード誕生、携帯・PHS

の加入台数が固定電話を上回る

2000年(平成12年)  
ミレニアムブーム、IT革命

が流行語に

2001年(平成13年)  
米国同時多発テロ発生

2002年(平成14年)  
日韓サッカーW杯開催

2003年(平成15年)  
米英軍がイラクに侵攻

